

愛宕山時代の思い出を語る

出席者

元AKK文芸部長 久保田万太郎

元AKK技術部長 加藤末丸

活動写真弁士 徳川夢声

音楽評論家 堀内敬三

NHK常任理事 矢部謙次郎

元アナウンサー 松内則三(司会)

編集部 皆様お忙しいところを御出席頂き有難うございました。放送開始二十五周年記念もまじかに迫りましたので、本日はその間に最も大きなウエイトを占める愛宕山時代のことを中心として、NHKを盛立てて頂いた先生方、或は大先輩の方々から貴重な思い出話を承らして頂きたいと思えます。司会は松内さんをお願いしますからどうぞ宜しく。

松内 愛宕山時代の思い出となるとこれは又我々にとっては頗るすこぶ關心の深いもので未だに古い芸人さんや出演者の方達はヤマヤマと愛称で呼んでいますね。

矢部 今でも放送会館のことをヤマと言う人がいるね。

徳川 大島伯鶴が馬垣平九郎をやると、きつと「只今は放送局が……」というギャグを使った。会館へ移ってからもまだやっていた。

松内 とにかく愛宕山は日本の放送の開始された濫觴らんしょう（はじまり）の地で、色々の意味で日本の文化を通して思ひ出深いものがある。私は大正十四年（一九二五）の十月に入って、初めて放送生活に入ったのですが、あの時の放送部は四畳半位の部屋だった。そこで全部の仕事をしていた。当時は総務というようなものはなく、技術と放送だけだった。その四畳半に十二、三人もいるのだから押すな押すなで坐る所もない。

徳川 その左側が八畳位で出演者の控室だった。

堀内 放送部は暗い陰気な部屋で、きたない机が五つ六つあった。皆出てきたら立っておらなければならぬ。幸い皆出ないからいいようなもの。

松内 放送部長以下皆あの部屋だったからね。あの頃は放送部長も何も無い、皆一緒くたにトグロを巻いたり何かしていた。服部懸夫さんの放送部長の時は舶来タバコ（入輪）の煙草がいつも我々の接待のために置いてあって、それを勝手に放送部員が吸っていた。だから一家団樂だんらくの形だった。

堀内 全体に今の会館とは較べものにならない、嘘みたいに狭い。そしてスタジオなるものが一番大きい。松内 スタジオは洋室と和室と講演室とあって、そのまん中に調整室が一つあった。あれはよく出来てい

た。そこに居ると全部一遍に見える。そこに此処に居られる加藤末丸氏が頑張っていてテコでも動かなかつたからね。(笑声)

加藤 あそこは非常によく出来ていて都合もよかったが、その為にかえって悪い結果ともなった。というのはあの部屋が一番見よいものだから、総てのお客さんが皆入ってきた。だから有名な人の放送がある時などコントロール出来ない程一杯につまった。例のダグラス・フェアバンクス(アメリカ合衆国の俳優、脚本家、映画監督、映画プロデューサー)、メリー・ビックフォード(女優、ダグラス・フェアバンクスの妻)が来た時などはどうもこうもなかった。それから北村技術部長がやがましい人で仕事がある時は何とも言わんが、暇になるとどの音が悪い、この音が悪いとしきりに小言を云う。株式相場の放送の時でも、もしアナウンサーが間違つと技術の方が叱られる。「技術者は内容まで聞く位にしておかなければいかん」という位やかましかった。

堀内 そのやかまし屋の下にあなたが又やかましかったのだから大したものだ。

マイクは御神体？

加藤 あなたと中村さんとのいつかの記念放送の時「加藤というやかまし屋がおって、これが亦功労者だった」と言つて下さったが、そのやかまし屋という訳は、「我々がもしマイクロホンに触ったら大変なものだった」と迎むか言まいましたが、あの時のマイクはダブルボタンと言うやつで、何かショックを与えるとアンバランスになり、電流が片側によって働かなくなる。だからそつとしておかなければいけない。

堀内 マイクは御神体みたいだった。

加藤 それからカーボンでしょう。カーボンは湿気を帯びるといかんから一遍一遍はずして乾燥機の中に入れて虎の子にさわるように大事にしているのです。そういうような時代でした。あの時分から見ると今はマイクも非常によくなって然も一度に何本も使っている。

徳川 あの頃は腫物にさわるようだった。

矢部 技術屋でないといじられない、背の小さい人が出てもう少し低くしてくれといっているので、ネジをひねって下げればいいんだろうと思ってやったら叱られたよ。

幼稚だった技術

加藤 これは昭和四年（一九一九）か五年（一九二〇）に若槻（若槻禮次郎）さんがロンドンから軍縮（一九三〇年開催。列強海軍的とした国際会議）の放送をした時のことだ。その時短波でイギリスかどこかが自分の植民地に放送してある。それをこっちでとった。ところがその時五時頃テストをしたところが、そのテストの時は非常によく聞えたので、北村さんあたりもこれでいいと小躍りした。そして若槻さんの放送の時にになると状態が変わってどうやら聞える程度になってしまった。あれはそれからあとになって短波を使うので分って来たことですが、短波というのは時間と距離によって波長を変えなければいけないのです。殊に昼の電波と夜の電波は全然違う。それでロンドンから日本に来るのにも何時にはどういう波長ということは、ちゃんと今ならきまっている。それを知らずに、英国が植民地に送るのを聞いてやったのですから、良いのが出る訳はないのです。今から考えると総べてそういう状態であって技術は幼稚なものでした。

松内 あの時はよく故障で放送が中断されたこともあります。その時アナウンサーが「機械の故障」なんていおうものなら技術が大変な騒ぎになる。それだからやむを得ず「都合により」ということをいった。今では「機械の故障により」ということを時々いつているが、あの当時はいわせないので。うっかりいおうものなら殴られる。(笑)アナウンサーは「都合により」という、それで何でも唯「都合により」だから聴取者は何の都合が分らない。とにかくその時は皆真剣に仕事をやっていた。それで割合いがみ合いがなかったですからネ。それは銘々が自分自分の仕事だと思っていからです。徳川さん一つ思い出を……。

徳川 愛宕山時代に、服部さん(元放送部長)の書いた本をやったことがあるよ。お茶を日本へ輸出した英才禅士というのを、書いた台本を見たところが、お寺に行くときよくある又国宝など拝観する時渡される何とか寺縁起というのがあって。あれなんだネ。文章から何かから考えても演芸の放送台本じゃない。こんなものやれるもんじゃないといってるうちに服部さんがハハハやって来て、「フランスの或る名優と劇作家が或る宴会の席上で喧嘩したことがある。劇作家は演技というものは脚本に責任があるのであって、俳優は或る程度ボンクラでも本さえ読めれば出来る」といった。これに対して一方の名優はとんでもない話だ、脚本は第二で総ては演技だ、脚本がどんなものであると、俳優の如何でちゃんと見せられるものだといった。劇作家はそんなことはない譲らなかつた。すると名優はそれでは論より証拠ここにメニューがあるから読んで見ようといつて、そのメニューをその名優が読んだが、最初の読み方で皆を笑わせ、次に同じものを読んで涙をしばらせたという逸話がある。だから僕の書いた脚本がどんなものであると、どうにも食えないものでもコックの腕前一つで食える料理になる筈だ」といわれた。そういわれると何とも返事の仕様がな

その中に「それじゃ一つコックの腕前拝見しよう」とニヤッと笑っていなくなった。やりにくかったが何とか寺縁起みたいな文章を読みました。そのことを私は「話術」という本を書いてその中に引用したところ、その部分がやはり或る種の感動を与えたものと見えて、何とそれが中学校の教科書に採用されたんですネ。そのためそのことについて過日聞きに來ました。「あの名優は何という名前なまえで劇作家は誰でございましょう」「弱たネ、これには（笑）」

「調べればそういう逸話だから分るだろうが、それは或る名優、或る劇作家でいいじゃないですか。話術が如何に大した威力をもっておるかということの例だから、名前分らなくてもいいでしょう」と、いって追っ払っちゃった。（笑）

矢部 それは服部の創作かも知れないな。

松内 今の話伺っていると当時の服部さんの風貌がまざまざと浮んで來ますネ。

「それじゃコックの腕前拝見しましょうかな」といって消えたところなんかネ実に。

矢部 服部は兎に角自動車で通ったりして派手にやっていた。

松内 歴史に残る豪勢な放送部長だったそうですね。かけて小笠原長幹が援助していたというのとだが。

矢部 細君が悲鳴をあげて、こんなこと長くやっていたら駄目だといっていました。尤もはじめから一年きりやらんという話だったが、一年経ってもいい気になってやってるからしめたと思ったら八月になってやめるといふ。それで僕が会いにいったら細君が是非やめさしてくれ、うちの経済がたまらんからといふのだ。

松内 私共大正十四年（一九二五）十二月やっと十万突破のお祝いを貰いました。何しろこのボーナスは金が集まらないからというのでなかなか出なかつた。ボーナスといつても技術、放送合せて十二、三人しかない。そのボーナスが払えないので夜遅く十二時頃迄待たされてやっと私は金一封を貰いましたね。

成功した御大葬放送

（久保田氏出席）

矢部 あの時代にはいろんな企画をやったね。御大葬（一九二六年十二月二十五日に崩御した大正天皇の大喪儀は一九二七年二月七日から八日にかけて行われた）の放送だっ

てそうですよ。何かいいプログラムがないかといいい出した。小柳多以知が御大葬の実況放送をやったらどうですといいい出した。その時は問題にしなかつたんですよ。しかし余り彼が熱心に言うので「通信省さえ、許可されればいい」と言っておいた。そして土岐重助という技師にその企画を進めておいてもらおう手筈をととのえた。ところがこれが新聞に大々的に出ちゃった。すると時の工務局長稲田三之助が怒って「土岐は日本の無線界じゃ、大家か知れんけれども、有線界の方ではおれの承認なしに発表したのはけしからん」というのだね。「許可するのはむずかしい」というのだ。「よろしい、それでは止めます。しかしその代り中止の理由としては土岐は出来るといふし通信省は出来ないといふ、技術の関係だといふ理由をあげて、発表します。」といった。「そう君みたいに興奮しちゃ困る」というんだが、こっちより向うの方が興奮して結局やることになつて、その晩からテストをした。愛宕山にマイクを据附けてテストを十二時からやった。稲田工務局長も来ているのです。なるほど聞いてみると漏話が入るんですね。赤坂の芸者が「早く急いでよ、鴨なんばんを

五つ」といっている声が入ってくる。

加藤　そういう漏話のない線をみつけるのにあの時は、六百回線あるうち全部外をころして、中の線を二回線かそこら使ったということを知っている。そして全然漏話のないいい線を徹夜で呼び出したのです。

矢部　当初は十二時から一時間全部赤坂局を御大葬のるほ函簿儀仗を具えた行啓・行幸の行列（）の通る時間だけ中止するということに決った。これは大問題なんですよ。おかげで成功はしました。あの時は私の郷里の山の中から手紙よこした人がいます。雪が深くで一週間の間新聞もこなければ郵便も来ない。電燈もない雪の中に埋もれてね。ところが放送だけは完全に来た。バッテリーの放送ですがね。御大葬の時も皆近くの人が私の家に来て、ローソクをあげて、東の方を向いて放送を聞いた。雪の中をラジオの電波だけが完全に通って来たというのです。これを企画した小柳の功勞です。

久保田文芸課長就任の由来

松内　久保田万太郎先生が放送局の課長をやったということは無論人から頼まれて已やむなくやったのでしょ
うが……。

久保田　矢部さんから頼まれたんだ。

松内　放送局の一課長として愛宕山に頑張ったことは、あなたのものを読むとよく分るが、恐らく世間には知らない人が多いのじゃないか。

久保田　あの頃の課長は偉かったよ。

徳川 一課長だなんて言って貰いたくない。(笑)

矢部 愛宕山にはプラスだが、久保田君にしてみればマイナスだろう。

加藤 私は久保田さんと一緒に課長をしておったが、この頃の久保田さんの社会に於ける地位を見て、あんな偉い人と僕は一緒に課長をしておったのかな。あの人は余程偉い人だということを感じて来ましたよ。

久保田 矢部さんの前は誰でしたかね。

矢部 煙山さんです。

久保田 矢部さんがいらつしやって私と久米さんを囑託にしたのです。それは昭和三年(一九二八)です。それから昭和六年(一九三一)八月に課長になった。何故それを覚えてるか、いうことを言いますと、囑託になる時、「一週間二度来ればよい。遊びがてら来てくれ」という。その時分は私は今と同じに彌次馬ですから宜しうございますと引受けた。間もなく面白いから勉強する。そんなに来なくてもいいといわれる程行ったものだ。何年かたって囑託というのがなくなり、その時矢部さんから職員になれという話だった。それは昭和六年八月で何故覚えているかというところが知れると、その時分は物珍らしいから新聞記者が大勢私を訪問した。その頃丁度芥川の何かでどこかに行っておったその留守新聞社の連中が来た。うちではびっくりした。何で新聞記者が来たかというので死んだカミさん心配した。というのはその前の晩非常に酔っ払って帰って来たから、前の晩何かしくじったのじゃないかと心配したのです。それで覚えている。

松内 それは矢部さんの放送部長時代の一つのヒットですな。

久保田 矢部さんわざわざ見えて懇篤なお話があったので、私でお役に立つならばということでお引受けしたのです。それから課長になれという時も、「ちよっと君あとでわたしの部屋に来てくれませんか」ということだった。その前に業務課長の小倉というのが、今度君達餓だよといっていたもんだから、八八一餓の宣告だと思った。それでおらず放送部長室には行って行くと暫くはそれを言わない、矢部さんなかなか切出さない。いよいよこれは言いにくいから言わないのかなと思った。それから「何か御用ですか」といったら「ここにはいって貰いたいのだ」、「はいるってどうするのですか」、「イヤ、新屋君のあと文芸課長にならないかという訳だ」、「ちよっと考えさせて下さい」といって引下って、それから私のことを始終心配してくれる人達に相談した。すると皆「それはいい、定収のあるのは、いいことだから」といってくれる。水上瀧太郎が賛成だし、三宅正太郎にも相談したら賛成だった。それで僕は「それじゃお引けます」といって引受けたが、囑託の時は一週間に二度出て百五十円貰っていたのが職員になったトタン二百五十円。

指一本が千円か？ 百円か？

徳川 あの頃の功労者は伊庭孝、小柳多以知、内山左平といったところ……。

矢部 内山君について覚えていることがある。それは羽左衛門（歌舞伎役者・市村羽左衛門）が洋行（外国旅行）するので、この

機会に放送してもらうことになった。その時服部がまだ生きていて、あの時の謝金が菊五郎（六代目尾上菊五郎）、羽左衛門皆五百円だった。そしてその時つき合ってた連中がいた。誰と誰が出たか忘れたが、羽左衛門が御祝儀をやりたから出してくれないかという。どの位？ といったら指で一本位ですかネといった。内山君が

服部にその話をした。服部はそれは当然出すべきだという。ところがその時二人の一本に対する解釈が違う。内山君は百円と、服部君は千円だという。とに角当人は一本とあったが、それは千円とも一万円ともとれるが、千円と百円でもんでいる。羽左衛門の意中は分らないし結局両方譲らない。そして服部が僕のところへ電話をかけて来て千円はずみたまえというのでそれだけ出そうと腹をきめていた。そうすると今度は内山君から電話があり百円だという。そして今度は服部の女房が電話かけてお前さんふんぱつしなさいよと助太刀してくる。そして、ジャンジャン電話をかけてくる。それで内山君に会って、「内山君解決しようじゃないか」「いや断じていけません、そうなら私も引きません」というので、それで到頭「それじゃ仕様がなし、二百円出そう」といって不賛成ながら納得させ、僕がよそからもらった意匠をこらした良い財布があったのでそれに入れて持って行った。内山君が帰って来たので「羽左衛門どうだった」と聞くと「こんなに貰っちゃすまん。わしが貰っておこうといった、だから百円でいいんだ」という。それから服部に二百円したといったらケチなことをしゃがるといった。あの時はどうしても両方譲らなかつたね。

初の舞台中継見事失敗

松内 舞台中継の一番最初の玄治店げんやだな（歌舞伎脚本「与話情浮名横櫛」源氏店ゆすりの場）の失敗談を一つ……。

加藤 玄治店げんやだなは当時劇場から愛宕山迄無線中継です。マイクロフォンを俳優の見えるところにやっては困るといふ、ところがあの時のマイクロフォンはさっきお話ししたように感度の悪いマイクロフォンでしょう。それで結局それは舞台の天井のスノコの上のせて、スノコの上は反響が多いのでそれはとてもものになるも

のじゃない。しかしやむを得ずもう新聞にも出てしまったし構わんというのでやったのですが、てんで失敗してしまった。その後長く途絶えておった。ところが技術の方でも、いいものをやりたいということで内山君と矢部さんあたりが骨折って貰って歌舞伎座から二月堂（歌舞伎「二月堂」
良弁杉湯由来）をやった。これは非常によかった。

松内 梅幸（七代目尾上梅幸）のね。あれはとてもよかった。

加藤 マイクロフォンを前において、反響のないように箱を作って内部にフェルトをつめてやった。ところがテストをやっている時大谷さんが来て「あんなみつももないことをやったら困る。」と北村さんの処へ来て行っただけです、どうしたらいいか分らるのでそんなら止めてしまえという気になり、矢部さんの処へ相談に行ったら「そんなに興奮するな、何とかしろ」というので、何とかやっちゃったのです。その時三宅周太郎氏が劇評を書いたのです。とてもよかったということで、今後はそのみつももないものを置いてもさしつかえないということになって簡単に出来るようになったのですね。

松内 堀内さん、音楽は放送につきものですが、当時のいわゆる邦楽に対する洋楽ですね。世間の反響だとか、あなたの苦労されたことについてお話し下さいませんか。

堀内 反響は大変でしたよ。時代が時代ですからね。投書が一日十通ぐらい来ましてね、大部分が「しめ殺されるようなソプラノは止めてくれ、バイオリンはのこぎりの目たてである」というようなことを言うてる。骨のある奴からは「汝等は日本人か」というのが八十パーセントぐらい来ましてね。

松内 投書層はきまっていますね。

堀内 浪花節（浪曲の別名）は支持者が多くてね。

久保田 投書が来てもちっとも困らなかつたが、しかし上の人達がこれを一々気にするのだ。これが一番困つたな。

厳しかった検閲

加藤 この頃のアナウンサーは恵まれている。あの当時のアナウンサーは喋ることがまるっきり制限されていて、一寸余計なことを言うと叱られた。昭和の初め頃総選挙の時だった。松内さんが宿直で受持のニュースをやっている。ところがどんどん選挙違反のニュースが入ってくる。一つ放送すると又持って来る。そこで次のニュースが入ってくる時間があつたので、「この通り違反が挙っておりますから皆さんくれぐれも違反をしないように御注意なさって下さい。」ということをやった。すると後で刑事がやってきて松内さんはひっぱられて行った。刑事は「貴様誰に買収されてこつこつことを言つたか」と言つて警察に一日留置された。そこへいくと今は自由で一身上のことでも喋れる。この間も「病気のため当分休ませて貰います」なぞと言つたりする。昔のアナウンサーは十分才能が発揮出来なかつた。

松内 アナウンズ学校が始まると僕もしよっちゅう行くのだが「個性を発揮しろ」ということを強調している、ところが昔は個性をおさえた時代があつた。機械のように扱っていたのだ。野球放送にしても、批評めいたことをいうと、公器を利用して批評を加えるとは怪しからん、という投書がくる。又こういうこともありました。私は昭和三年^(一九二八)から相撲放送をやつていて昭和十三年^(一九三八)迄続けましたが、その年の春場所を最後として大阪に転任することになった。自分としては十何年もやつていた相撲放送であるから、聴

販者に挨拶する位は許されていいと思ひ、相撲場からこれこれの事情でお別れしますとお別れの言葉を述べた。そうするとこれに対して喧々囂々たる非難が加えられた。而もそれは外部じゃない内部に、自分を売るといつて非難の聲が上った。総てそういう時代でした。

徳川 スポーツ実況放送だけが台本なしで何んでも喋れたわけですね。

松内 それでも大分うるさかったですね。野球と相撲の両方がある時、放送は相撲を中継している。聴取者としては相撲を聞き乍ら、野球の方も気になる。そこで現在得点が何対何でどっちが勝っているということ、を相撲の合い間に一寸入れると忽ち通信省から始末書を取られる。そこで一策を案じた。国技館の放送席の隣が国民新聞の記者席なのです。そこに野球場から電話がかかってくるので、「只今国民の記者がこう言っています。法（法政大学）立（立教大学）戦は今何回で何対何だそうですね。」とやる。これは隣席で話をしていますという場内スケッチ、これなら許されるという状態でした。

徳川 松内さんは野球放送では神宮球場上空によく鳥（六大学早慶戦で「夕闇迫る神宮球場、ねぐらへ急ぐカラスが一羽、二羽、三羽、……」と放送した）を飛ばし、有名になつていますが、本当に鳥は飛んでいたのですか。

松内 僕は嘘は絶対に言わん。

久保田 あれは本当に飛んだんだ。

矢部 外苑には鳥が多いということは長田幹彦君も言っていた。そして松内君の鳥は本当だと言っていた。それにしても試合のクライマックスで鳥の描写を入れることはホッと一息入れられていいものだ。僕は罰俵も食ったことがある。これは日本放送協会の職員で初めてです。それは宮中で内親王（女皇）が産まれたのを親

王（皇子）が産まれたと江木アナウンサーが放送した。それで罰俸を食い、それから罰俸の制度が出来たのです。あの時は理事会を開いたが、あぶなく鹹くになる所だった。進退伺いを出して一週間謹慎していたらやっと宮内省から進退には及ばんでいいだろということになって首がつかった訳です。

観兵式玉音放送事件

加藤 これは矢部さんに謝らなくてはならない話なのですが、昭和三年（一九二八）十二月二日の大礼観兵式の勅語放送の問題です。あの時技術は私と越智君でした。乗用車の中に機械を置いてやっていたのですが、あの放送が出た。別に勅語放送をしてはいかんといいことは聞いておらんがどうしようといったら、越智君が大きくしろというのでわざと大きくした。所が後で矢部さんが宮内省に呼ばれるやら、逓信省からお小言頂戴するやら、越智君はマイクロホンと陛下の玉座との距離が幾らあったかと調べられるやら大変な面倒なことが起った。

矢部 その日は休みで私は家にいた。かけっぱなしになっているラジオから観兵式の実況が出ている。聞くとはなしに聞いていると、閲兵が終って陛下の勅語が御下賜になる。大礼観兵式に勅語が下賜されることは聞いていたが、ハテナこの勅語が放送に出るかどうか、これはどうなっていたかなと思って聞いていたところが出て来た。サテ勅語を放送していいのかわかぬ、これはいかんぞと思って早速浦和から愛宕山にとんで行った。汽車から降りて新橋に着くと知人に会い、「お目出とう」と言われた。「どういう訳か」と聞くと「勅語が入ったではないか」という。これはえらいことになっちゃったと思って山へ上るとすぐ「も

し通信局から電話で今日の放送は誰が監視していたかと聞いてきたら、放送部長自ら監視したと答える」と言っておいた。やがて電話がかかってきて何故勅語を切らなかつたかと聞くので僕は「放送禁止事項には風俗を害するものとか、公安をみだすものとかいう禁止事項はあるが、その中に勅語は入っていない。私は一寸躊躇したが勅語が禁止事項に触れず切断する理由がないのでその佞流まがしたのです。しかし私は当然責任は負います。」といった。それから事件は益々拡大し、中山常務理事、通信局長、電務局長、通信次官、通信大臣陸軍次官等の間に色々の折衝が行われ、話が難しくなってきた時、たまたま久邇宮のお附武官が、大妃殿下がああ放送を聞いて大変お喜びになったということ陸軍次官に語り、これで陸軍の方もホッとした気持ちになり、宮内省と折衝して事件は急転直下解決した。ところがこの裏に、も一つ話がある。観兵式の翌日の新聞を陛下は御覧になり、「玉音（天皇の肉声）」マイクに入る」などという見出しでデカデカと出ているので、陛下は気になったとみえ、侍従を呼んで、自分の声がどんな風に聞えたかと聞かれ、お附の者が大変明瞭におごそかに聞えましたと答えたので、陛下はニッコリお笑いになって喜ばれたという。陛下はマイクに立たれることは決してお嫌いではなかつたのだ。その侍従は私に今後はドシドシ玉音放送をやれと言ってくれた。この事件以後通信省はすっかり神経過敏になり、上野公園で東京市の奉祝会があった時は、陛下が東京市民に勅語をお読みになるとたん、通信局長自らスイッチを切るという慎重ぶりだった。

二・二六事件 危ぶなかつた愛宕山

久保田 愛宕山時代の重大な思い出としては、二・二六事件がある。あの日僕は風邪をひいて寝ていたら、

電話ですぐ出勤せよというので何事かと思い、すぐ国際タクシーに車をよこせと電話したが駄目だと断られた。配車の小川君に「何とかして車を廻してくれないか」と頼んだが「ちょっと今日は……」という。何が何やらさっぱりわからず、僕は表へ出て円タク（料金一円均一で走ったタクシー）を拾い「愛宕山」と言ったら「さあ、行けるかな」という。「どうして」と聞くと「貴方知らないのですか」実はこれこれと説明されてやっと大体わかった。山はさぞかし人が殺到しているだろと思つて来てみると、局の中は森閑としている。江木さんだけだった。僕は今にして思うが、反乱軍が新聞社なんかには廻らないですぐに山に来て、江木さんに放送しろと迫つたら、軍人だった江木さんのことだから、成程そうかと思つて放送をやったかもしれない。

徳川 あのすこし前、オーストリーで革命がもう少しで成功しかけたのは、革命軍が放送局を占領して国民に呼びかけたからだ。

久保田 僕はその日の昼の演芸の時間、一課長としてとにかく自分の責任として、演芸放送は出来ない、止めようと思つた。現実にはこれ丈の人間が殺されているのだから。しかし本部からは通信局から中止命令が出ない以上放送は出せ、人心を一新する為にもというのだ。冗談言っちゃあいけないという訳で随分やり合ひ遂に中止となったが、止めたことはよかった。出したらとんでもないことだった。

松内 あの時同盟（一九三五年から一九四五年まで存在した通信社。一九四五年十一月、共同通信と時事通信に分割された）の記者が野中大尉に会い聞いてきた話だが、彼は朝日新聞を襲って活字をひっくり返して帰ってきたが、かんじんの機械をこわしてこなかったことを地団駄ふんでくやしがついていたそうだ。その時野中大尉が述懐しているには「先ず警視庁を抑え自分達の行動のやりよいようにしなかったことは大変な誤りだった。それから放送局を占領しなかったことは一生の不覚だっ

た」と語ったそうだ。あの時放送局では善後策を講じ、一体そういう場合アナウンサーは如何に処置したらよいかということを上司に伺ったら無抵抗主義でゆけという答えだった。それから陸軍省にたのんで放送局護衛の為、騎兵一個連隊来てもらったら、あにはからんやその隊長が反乱軍の味方だった。局の者は皆護衛がついたので、これで安心と置いていたのだから滑稽だった。

あがつちやつた浜口首相

松内 愛宕山時代を思い出して今でも懐しいのは、放送最中電話がかかってきて、「今の曲は大変いいからもう一遍やってくれんか」という。そうするともう一遍やる。時間が延びることはお構いなしでそういうことは度々ありました。聴取者と放送局が気楽に結びついていたのですね。

矢部 時間の伸び縮みはやかましくなかった。浜口総理大臣（浜口雄幸。ライオン宰相と呼ばれた。ロンドン軍縮会議当時は首相）の放送の時だったが、秘書官の中島彌団次が来て「総理の放送は二十二分何秒だ」という。どいう訳かと聞くと「原稿がちゃんとそうになっている」という。「そうちゃんと行くものですかね」というと、「そうなる、浜口さんはその為二度もテストをやったんだ」という。当日も首相は早目に来て私に聞いてくれと言ってテストした。そしていよいよ本番となったらこれだけの人でも放送となると上っちゃうんですね。議会のどんな討論でも堂々とやる人が放送では上っちゃうって、二十三分どころか十九分で済んじゃった。（笑声）

徳川 間がもてなかつたんだな。

松内 後藤新平はあのような豪放な人だが、あの人の演説原稿を見ると十分前、五分前と書いてある。あの

人にしてこの細心ありと感心しました。それから永田青風（永田秀次郎。青風は俳号。政治家。様々な大臣を歴任）は演説の名人となっているが、名人決して自分の芸をおろそかにしていない。絶えず色々と調子を変えて稽古していたようでした。又原稿の中に予算などで三百万円という数字があるとそこに注意書がついていてわざわざ三百万円と言い、そして「アッ違いました。三十万円どころのさわぎではない。これは三百万円です」という。それが原稿に書いてある。

徳川 それは恐れ入ったな。

松内 名人芸は一日にして出来ないものだと思った。大分話の花が咲きましたが、この辺で終ると致しましょう。皆様有難うございました。

- 『放送文化』（日本放送協会、一九四九年三月）所収。
- 理解を助けるために適宜割注を附した。
- PDF化にはL^AT_EX 2_εでタイプセッティングを行い、dvipdfmxを使用した。

ラジオ関係の古典的な書籍及び雑誌のいくつかを
ラジオ温故知新

<http://www.cam.hi-ho.ne.jp/munenhiro/>
に

ラジオの回路図を

ラジオ回路図博物館

<http://fomalhaut.web.infoseek.co.jp/radio/radio-circuit.html>

に収録してある。参考にしてください。